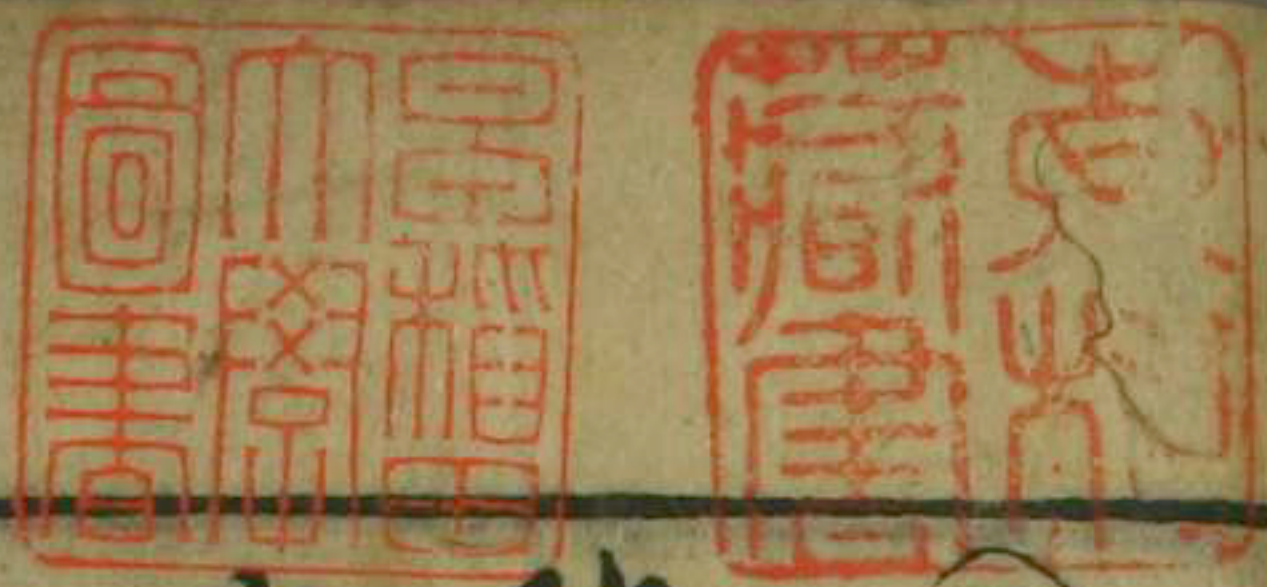


門儿名
籍 1158
卷 1.5

門儿
3459
卷 1



昭代

昭代後字以文德洽海
內故雄文碩學士相
繼不絕豁然眼目戶選
家論獨東都名園之記
寂不見每以為恨焉

續口口少

先有江戶鹿子者取之
讀之采選東都佳境
古點合為若干只恨其
聞見不博如今而觀
實九牛之一毛如朱砂
子之編纂亦淺中眇見
曷免空疎編成之後再
三校定之間余聞見之
所漏遠迫為之告來殆
滿机上板重謀嗣去吟
呼是亦未免五十七句
矣

時享保二十年乙卯春
東都誦林菊岡沾涼述



凡例

一江府元四方四里余其中府内と稱する所
方二里中央也 金城あり本邦此諸候大夫
大小法館舎覺滅並(軒)を連く遂一以
記す事不能故江都乃圖と別は滅し顯之
一江都町敷凡一千四百余其中寺社門前と稱
所四百所計橋大概二百余之其内各月と
呼ぶ百余之坂百余之河過半號あり神社大概
二百余社寺院一千有余宇大略の積りに

續江都抄

併に記す事あり

一前編に漏るる所の神社寺院名園古蹟拾遺

或は前編に其名目ありとて一とて來歴

香しかりし補の印を以て補之

一凡名産藥品、際限あり唯園傳の一二を奉

一神社靈佛名樹等の類聚を前編に其來由

委す、○環点に或は補を以て其新なる

増の印を以て分る

雀下菴房行誌

續江戸砂子温故名跡志卷之一

菊岡沾涼纂

○江府年行夏

○御城御規或略記

○節序

○寺院法會

○市中時節售

○五節句辨略

○月々和名

○神社祭祀

○江府名産 并近在並國

○飲食

○菘蔬

○菓子

○笑用

○菘類

○鱒魚

○穀類

○菌類

○介貝

續江戸砂子

○江府年行夏

正月

和名を曉月より清浦真我抄よりたつて年一き
ゆきくはあひびつる月とを解せり

○ころめと云は ちらぬと云はむいふそのののき方よむいふ合すり
なり人の歯と云ふ余とすあは歯のよとよつひとよむいふあは歯固
らんし世諺同書云正月よりくまひひの世

あまのやのみのかとてあはせう極そそあ甲を君らししを
らふを備はるるの心は帝の世時並にの事なり
時大付の事なるのうたふるこし又とて先のかげのこし

○お先けし先 姫目始 又馬始と云 までて女のこころをのり
あまをくろくこりけりあまのさし又まはるるあまのさし

○まはるるあまのさし 着備始 あまの夜ををらふ一とひひのさし
まはるるあまのさし

▲元日 御一門方御普代大名元御礼 装束

玉燭宝云一月と天日正朔とらふ又三元と云羊の元日の元日の元なり
今三元と稱して元三と稱し又二始と云 熊鷹傳 又三羽と云 孔光傳

○唐衣方御礼 羊玉扇賣 佐及六賣 水飴賣 万歳 大ま茶

▲二日 御大名元御礼 装束 たりと云

本支州古書云一日を鶏と一日を物と一三日と物と一四日と羊と
五日と牛と一六日と馬と一七日と人と一八月と穀と

▲一日 法大名子息方并法後官御礼 京大坂奈良堺 町人御礼
伏見屋敷の御礼

▲三日 御徳初御普代大名元御礼 御儀堂献上四座の御礼 御大廣
間の御板橋の御禮 老松東北 高破三番しけ水法火の御礼

▲三月 上野大陣詣 月並あはれとありつてあはれ
御馬乗初 ○四日奉裁 ○六月奉裁

○八日 幸始、い房中筑目菟ホを竿の先子付てさく物
○十日 湯治天神宮祭日、高日碓麻記あり係を破之る
くくまたらして氏子中人配りてむしハ正月十日し
沖上の沖祥月名もて宝永の後より高月より

○十五日 涅槃會

法華經のこの書圖

佛祖流記云周の昭王二十四年四月八日釈迦佛生とあり周乃
代の子の月ハ今歳首とて周の正月ハ今歳首の三月なり
は代の二月ハ今の十二月ハ佛生日の四月ハ今の二月八日ハ
周の代の子の正月を今月ハ夏の寅の月にして夏はあつた云
世尊年七十九歳二月十五日夜夢日滅没一夢拈輪王の法よ
よめて推擲し收め白髻を以て常小力士四人常と昇にかた
くせとて奉にハ力士乃至十六力士とて昇とて奉に奉に
阿泥擲豆告て云くまの城中人頭して奉に奉に奉に
尔時摩訶迦葉智光を以てかたの身を以て畢練羅窟よ

已衆を以て深羅林中より佛即令捨より雙足を出て
示し而足自收めて推乃自奉に虚空より昇る事なるこ
七多座樹なり拘尸那城の西門よりして東門より入りのま
く四方の城門より出入して城を遠りかつて大衆即チ
如來の紫磨金身を披けて推を出して宝林のうへに置き
妙香水を以て波灌し梵羅綿を以て白髻を以て
ちう推入法天人等より各々を價の栴檀沉香木灰
おして大香鬘を纏て推を以て人より推を以て香油
を灌して茶毘とて矣涅槃經及釈迦譜説

法華壽量品

爲度衆生故方便現涅槃而實不滅度常

住此説法の義 總のの月と入りて人より推を以て香油
○廿五日 平川の天神より法華經の所影なるし明 約高竜眼寺
○月日 亀戸祀禮 神前より祓糸と奉いしし推を以て
らる巫女の作つ祀と持せて奉いしし事し信を祀りて云

此集に大つてのつれしあつて髪をさへり赤く富士禪定の心
 かりのり藤茶を煮たり寺らつて佛酒等の物を飲つたり
 高木の産の五色細袋軍靴しつて煮たりはゆる蛇成り
 振柳杏李木のつるものあつたり酒を入て煮たりは煮るもの
 蛇は延宝始のころ雨の女とんを煮たりてはゆるはらうは
 うりあつものやまきくあつてはゆるはらうはゆるの形も
 ゆるりあつものをまひつてあつたりはゆるり子供の煮物
 多あつたりはゆるりあつものあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 中これにせいのあつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 ○三月より十二月まで 本和法息寺 本中宗延寺 本寺ととに法和千部修り
 ○四日 箕輪祭 ありはゆるりあつたり
 ○五日 神田牛乳天王祭 大徳寺御子の縁立 八日 還興
 ○六日 神舞を祭より日し 懸法の寺の本草よせり
 ○七日 神田天王寺神輿出 ありはゆるりあつたり 十四日 還興

○七日 高川天王祭 小川南京川にあ社なりあ社より月日
 あ社の神輿小川中の橋よりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 みの橋を折つてはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 ○十日 神田天王寺の神輿出 小松町より縁立 十二月 還興
 ○九日 鳥越明神祭礼 湯平元を載 神主福木太道
 ありはゆるりあつたり 湯平子 寅辰午申戌
 ○十四日 龜ヶ戸香立明神祭
 ○十五日 山王祭礼 長田の切 別當初野院 林主樹下民部
 京都方の大祭なり神輿の通筋往來を禁す所は橋あり
 但し二階橋を禁すし幕を懸きしはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 く、矢来として仕切りしはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 也あつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 二つら外高神主衆徒十騎 俗二法作武老と云 懸るひを上げ上 是年いぬ一戸
 移りありあつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり
 ありはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるりあつたりはゆるり

一の鳥居の前へ流るる登壇の扉の裏にありて麴河津若洲門へ
入次上竹橋門門大下馬より常盤橋へ出本所十間店本所
強地所小艇所小艇所 若殿橋をこす東陽所○所縁所
奉幣ありしれより目下橋通所 若殿門より入て霞の園
沙のよ還興し

○月日 赤坂氷川明神奉祀 小六の奉祀云 別為大案院
満年 子寅辰午申戌

○月日 浅草寺の奉祀 月日 沙の所らとらありあり
○月日 芝浦小艇酒所 身におるす 為目す 浅海止

▲十六日 嘉祥の所祝 四季物語 仁明のとき 倉き 兼 志比 母子
所代のさう申くすといれせたりて 賀茂上のみ中らあり
ていへしひかり 柳とあはれ六月十日あり 六月の吉日
あてめて嘉祥とすといせしうのさうくは事嘉祥と満年

深のりてさこめと道とと 嘉祥の常時日記あり。又後
後 嘉祥即位へまゝあり 嘉祥の嘉定の後十六文を
以て食物と賞て 柳子供とて 柳を 嘉祥の後も柳の
日に 柳をさしとありと 東見記よりあり。又嘉祥の子の尻子 出
世 嘉祥のひつり 室所 嘉大樹の所 六月 納涼のつとむのさあり
揚弓と 柳とて 柳とあり 柳とあり 柳とあり 柳とあり 柳とあり
て 食物と賞て 柳とあり 柳とあり 柳とあり 柳とあり 柳とあり
乃 嘉祥より十七年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり
十六年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり
乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり 乃の年あり

○十八日 四谷千代天王奉祀 以 縁不石切所 別為空嘉院
満年 丑卯巳未酉亥

○廿四日 龜ヶ天神 乃の 後 乃の 後 乃の 後 乃の 後 乃の 後 乃の 後
○月日 愛宕千日奉

○毎日 浅草寺花鑽

○月日 佃徳行吉の市被

八月廿五

六月後 相御と

かきつひりゆなをこしとらふ。○六月の月あつて後、東鑑にあり

かきつひりゆなをこしとらふ。○六月の月あつて後、東鑑にあり

○石の茶垢 相列大山石尊 朔日山 六月廿八日 七月七日 至

深草川より一七日ありとらふ。○六月の月あつて後、東鑑にあり

あつて後、東鑑にあり

あつて後、東鑑にあり

あつて後、東鑑にあり

あつて後、東鑑にあり

あつて後、東鑑にあり

七月

七月 朔日 浅草寺花鑽

○朔日 浅草寺花鑽

○四日 小塚原にて刑死の七福

○七日 七夕祭

○周慮風土記 七月七日 其夜を掃

果を役げ香粉を河鼓織り

○本朝にて孝徳天皇天平勝宝七年

○月日 立花御所

○月日 九品佛茶

○十月 浅草寺四万六千日茶

○月日 浅草寺四万六千日茶

○月日 浅草寺四万六千日茶

○月日 浅草寺四万六千日茶

○月日 浅草寺四万六千日茶

此の如くして為人を保護す。○今月の節被出つ。天曆節
慶喜 月未くする月考れこの月の末の月子始る月を記

○八月十五日九月十三日 慶喜なるは若狭守なり是月日
○又菅神楽府にて十二束の沙流作ありされは

○十五日 放生會 八幡の沙社祭礼 市ヶ谷八幡 満羊 子辰午申戌
深川八幡 満羊 丑卯巳未酉亥 市ヶ谷八幡 満羊 子辰午申戌

田町八幡 日 子辰午申戌 西窪八幡 日
高田八幡 日 子辰午申戌 渋谷八幡 日 丑卯巳未酉亥

○廿四日 龜戸天満又祭礼 所縁不堂川を四目ノ東 別為菅原法政
隔年子寅辰午申戌 ○廿五日 別為子て餐應所ノ下ノ長子ハ辰戌

九月

○朔日 今日より八月十七日 裕教を乞ふ九月より 紫衣を乞ふ
▲九月 室湯の沙社城 九湯敷くはよき湯と云九湯はあなと云

○菊酒 九月九日 菊酒を食ひ菊酒酒を飲むかの事くはれ
む人をし最勝なり。○菊酒酒の物法 菊酒銘の時と

○九月より十八日まで 三田 春日の祭日
○十日 小石川氷川明神の祭礼 満羊 別為 徳永寺 宗慶寺

○十三日 深川神楽祭 別為 徳永寺
○十三夜 後の月と云 秘神の記 栗枝登 多と月日

今日月と考れしより 徳永の記 栗枝登 多と月日
父音卷 九月の比夕きりの若小形よりかきりありと云子十二束の月

乃いしと云やうしあり かねてし小くの事ありたり
○八月十五日九月十三日 慶喜なるは若狭守なり是月日

○又菅神楽府にて十二束の沙流作ありされは

徳川実録 慶喜 月未くする月考れこの月の末の月子始る月を記
○八月十五日九月十三日 慶喜なるは若狭守なり是月日
○又菅神楽府にて十二束の沙流作ありされは

○十五日 髪置 三浦本の中使今日より髪置を御祈りし白髪と志付て一名をさうけしと云 麻呂子末廣杉板の作り新と五穀の水引と云ふかきり流しおぐりて氏社に詣りて音楽に橋立七色ハ解解ひと云ふ成元服初穂束を舞くは日と申す

○廿二日 廿八日 御儀 一向宗勤行 東西本願寺に詣りけ日のる表門前の法堂よりおろし聴流子齋戒時とすむ一宗の老より法儀小神と名付あさ子夜夜と稱し流日奉儀と

○廿四日 大所儀 天宮御共大所の日し大所儀とすけ日民多より小をうぬをたし

○廿五日 六月 青陽病霊雲寺 経路権頂修り

○酉の目 葛西より又村鶴大明神の宗市立 三浦有は三日た市立

○は月信液をまき人外 佐伯の香園だんをそのあめさるそのるは都よりあくとまふあるは又末廣をいと美美と云ふとた来し二月の末より御園に

十二月

○又云云 又控月と云ふはけきし 敢ては月と云ふは

○朔日 乙子の餅花 世徳川びら餅と云ふ今日より

○八日 半細 ぬごをらるる二月あかし 今日取瓶と云ふ

▲十三日 御旗掃 鹿島方御旗と云ふ多きありと云ふ

○十七日 十八日 夜 浅草市 靖國 江戸才一の市浅草橋より市物みりく浅草系形並ありより雷神の大道東の五丁が海と三側四側より並ひ地す地すして油の油のあをみり云ふ

○廿日 前分 下谷半天神おけの参事 〇元と云ふ

○毎月 浅草寺 救急心経の札配
 ○同夜 王子橋筋の狐火
 ○月日 神田明神 羊麩のそと
 ○法社 羊麩 救急
 弟の市 大通り 夜中 市商人の元納め

○月並奉請の場訓

○三月十八日 上野 兩大師
 ○八月十二日 薬師 ○芝居
 ○八月廿八日 難司 石鬼子母神
 ○十五日 八幡 本石 三田 芝居 谷
 ○十五日 神田明神 芝居 明
 ○十八日 浅草観音
 ○廿四日 芝居 寄
 ○廿五日 天神 湯島 龜戸 小日向 平川 大産 七ヶ所
 ○卯日 龜戸 妙儀
 ○己巳 并天 松のり

○山門の開日

東叡山 上三 文殊并
 増上寺 上三 十六羅漢
 浅草寺 上三 文殊并

正七月十六日 ○八月被家の入。中。明 ○三月十五日 ○四月八日

○江戸名産 并 近在近國

○塩漬 櫻漬 日本一 南一丁目 塩漬 山城
 京建仁寺 龍心 和南入 案の時とろろ 林和靖の末裔 林清因
 とろろ 龍心の身子 あり 奉納 多し 奈良 子 成と 塩漬と
 わらわ 櫻漬を 製法 あり 奈良 子 成と 塩漬と
 かし 江戸 一丁目 あり 製法 あり 丸塩漬の 製法 林氏 あり 林和靖
 の 製法 あり 江戸 一丁目 あり 製法 あり 丸塩漬の 製法 林氏 あり 林和靖
 ○塩漬 和申 茶の湯 丸塩漬の 製法 林氏 あり 林和靖
 ○鳥飼 櫻漬 本町 一丁目 鳥飼 和申
 ○猿 櫻漬 本町 一丁目 子 猿 櫻漬
 ○壺屋 櫻漬 元飯田町 壺屋 六茶
 ○園の梅 芽 唐菓子 本町 一丁目 丸塩漬 後
 ○砂糖 漬 本町 京坂 本町 三丁目 堀丁 水本 河内

○丸屋末肥

神田版治町二丁目丸屋播磨
寛永のころ中嶋津野のりより末肥を製しその
ありきいりて丸屋末肥を製する者なり津野のりより丸屋の製
丸屋より西の芝野し今なき丸屋なり

○丸山極焼

播磨赤松寺門前 芝野丸山極焼
赤松丸山極焼を撰り餅をくまぬり風味丸山かりけ

○華身白雪糕

神田と一箇所 華身白雪糕
情思丸なりきり餅をくまぬり代りをおく言に連肉を云ふを
を製しと云え縁の餅をくまぬり丸屋の製り代世
びあまきりて則た云

○抽餅

おらきりのみ 眞様
餅をくまぬりて餅をくまぬり

○赤慢

赤慢今赤心の名物と根元八慶安のころは赤
まろしりありその根元の餅をくまぬり製しと云えり
おのり餅をくまぬりて餅をくまぬり

○紫世餅

あま月と和乃信 小松有松
餅をくまぬりて餅をくまぬり

○物製餅の焼

くまぬり餅をくまぬり 揚子丸山
皮薄餅のくまぬり餅をくまぬり

○目黒餅花

目黒の名物と赤白黄の餅をくまぬり
餅花のくまぬり餅をくまぬり

○目黒粟餅

目黒の名物と餅をくまぬり
餅をくまぬり餅をくまぬり

○目黒餅

目黒の名物と餅をくまぬり
餅をくまぬり餅をくまぬり

○花餅

川口有根元
餅をくまぬり餅をくまぬり

○花餅

餅をくまぬり餅をくまぬり

○新刊 播磨物 江戸にて一の産

神田中町 新刊 江戸にて一の産

○幽齋鏢 新刊の一洗

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○茶四郎焼 茶碗水さりの煎

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○茶碗水さりの煎

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○花林尺八一流の細工古今新刊

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○羽衣茶煎汁 京とて一洗

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○甚三初汁 御用は初汁

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○又金燻 煎茶の煎汁

江戸中町 新刊 江戸にて一の産

○神田茶 煎茶の煎汁

○堀所雪路 堀所を所 長及市 煎茶の煎汁

○切也雪路 堀所を所 長及市 煎茶の煎汁

○作 堀所を所 長及市 煎茶の煎汁

○の 堀所を所 長及市 煎茶の煎汁

○新刊 江戸にて一の産

江戸にて一の産

○池の湯きせる

江戸にて一の産

○茶場所 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○亀井所 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○荒味 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○茶茶細工 煎茶の煎汁

江戸にて一の産

○鳴子丸 餅丸し 柳本村鳴子宿 丸の名物也 江戸より三重に

○府中丸 餅丸し 甲州及三井土の地 名物 江戸より三重に

鳴子靴襪 石原 谷保 俗義云 国分 水神 府中 足袋 西の

と称はけり 江戸より西の地 名物 餅丸と称して上品なり

又豆列香黄 志下 猪淡 蛇塚 横濱 下総の松井 所門 折立

及魚 中込 等より出るを東と云ふ 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

目黒 千束 筑ヶ谷 赤見 合氣 後田 徳島 道次 矢口 鶴見

八幡塚 等より出るを東と云ふ 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

又江戸へ一番子出る丸は 駿河 安西 井宮 河原し

餅丸の俗名 直葉丸の事 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

村より 江戸の餅丸上品 法法と云ふ 餅丸の俗名 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

餅丸と云ふ 餅丸の俗名 江戸より 餅丸と云ふ 江戸の

子似りる長くし西園ゆり小大根とあり波多野と大根より
一々しちのりし物一類し本草云生平陸匪蔓菁若蘆
蕨来之不難烹易熟飢来獲之勝梁肉とらこはやく
○下総國香取郡小見川大根塚内田生用と云ふ大根長三丈
許。周り一尺七八寸あり味むらや一筋子十本ありと云
献上并沙及人をもとりやうし一筋の中き

○神大寺蕎麥

いづれ七里中野のえ 向東の蕎麥は潔白なり
甚くよくあつくぬ味しけ不いあ海とまし蕎麥子麩せり熟してをむ
い土のりき餅のり一煉馬中野西条のそばかとしり一志一穀月
よくあきさ中(賣買の積)もよなきはふりて上品なう多くはだ
佐濃蕎麥は土地の志ゆりり不重子穀目多し一は府蕎麥切か
葉のものいあよく佐濃をぬゆし

○小金初茸

下総国香取郡小金の色下より出 江戸より六里に
相列茂次戸塚色より出初茸は下総より出 糸もあ列ハ

傲砂とくし歯きりてりやしし下総の海軍一海味を佳し

○水戸松茸

江戸より三十里 江戸府の松茸のうりやうりぬ也し
甲外ゆゆ外ゆゆりぬる松茸は江戸府の日を経れぬ肉乾り

○赤い芋蕨 同芋

赤い芋蕨は江戸府の同芋 江戸府の同芋

○芋蕨

芋蕨は長六分 芋蕨は色濃味し六月の秋盆前後にのみなり

○岩槻半旁

岩槻の内は江戸より九里 長二尺をこて四五寸と

○大浦半旁

大浦の半旁は江戸府の半旁 都及弘毅は常におき此之佐根の長は今迄

○八方

八方は豊後國入の黒し 江戸府の八方は豊後國の佳蔬なり

○平皿

平皿は蕎麥子麩をこして 蕎麥子の佳蔬なり

○牛蒡

牛蒡は又牛蒡大か成ハ鼠糞子と云牛蒡根の切株多き事
牛蒡のよんり糞老書老人の中風子牛蒡根の乾よりをまして

一升白米合おろしつぎ合七餅と一豆汁と七葉葱椒

と細く切らば子食してさるるの効あり

○葱椒葱 葱少く白根多くとくさくさし甚其味し

高木園東の葱の佳致せん○頓死のふ葱の茎と男は左女は右

の葉七八すさ入血少く鮮又身入血少く活る水草扁鵲秘法

○清水夏大根 板橋のされはさより二重すや

けあぢもれはさよ樹の傍よりさるる魚の類そへ生さ

くゆて毎々いよの極は役けてさるる

○佃の白魚 又麵條魚 又白小魚 他表海にありて二月の比

川よりさる○白魚は氣とよさる性あり産婦合さるる氣は

さるる魚はさるる水とよさるる魚はさるる○杜子魚白小魚

天然二寸魚又多之目白小 白小も麵條魚とぞ潜確類書云

○浅草川の白魚 びりーは海川にさるる一と實れれまの

○浅草川の鯉 物形量花川の魚とては鯉の色今もさる

ふ別浅川の鯉より揚りてりといふ○和漢ととも鯉は法魚の

と説とせり兩傍の一條の鱗大なりとて二十六あり神農書云

鯉為魚主○煮て食せれば水腫を治し小使と利脾胃補ふ

○多摩川鮎 多摩郡の川に江戸の魚もある六所の川に

一名香魚とて香のよき魚なり雨航雜錄云香魚鱗細く腹さ

る春の初生は月子長きる事一寸を月子至長盈則

漸際より少しく子生るとて日本紀に神功皇后名細鱗魚を

得ありとあり細鱗魚年魚とてありと分ち○雌雄とて

雌魚より小くが産くはくさくさして色萎くし子葉の

色より又白きもあり雄魚より小くはくさく色雌より

淡くはくさくはくさくはくさくはくさくはくさくはくさく

○江戸鮎 中瀬の魚とて江戸の名産なり是して鮎平岡子

かきしは江戸をさるる魚と稱して法魚は佐保し

○業平橋蜆

沖之なるり多木の嶺にありて名を冠し
隅田川の上荒川にありて名を冠し
蛤月あり味甚よわし別海蛤名を冠し

○中川鱧

夏の末林の中に入りて居りて大きき七八寸ほどあり
其肉潔白なりて性やわし病人食して好

○虎鱧

佳品にして生乾又よし。本多子裁せ居世に鱧残魚を鱧と
稱せしあやまりしと云本多子の鱧残魚は鱧魚と
あり鱧魚は鱧魚の鱧魚は鱧魚と

○狭池例魚

ところかたが石川橋永代橋の邊上あり
肉軟脆味清美なりて性やわし病人食して好

○大坂川尾子鱧

川尾の種代のおとよきと漸よの種
合ひし又小川にありては別海蛤より大きし

○深川蛤

佃沖 秋の末より冬に至るまでありて
とがとして大ききもの標し 月令 孟冬之月雉入大水為蜃

註 蜃 大蛤也 海傍蜃氣成樓臺

史記 蛤 蜃を呼ぶ
樓臺を成るを蜃を呼ぶとあり 蜃氣標は蜃を呼ぶとあり

○淡草川長海老

おま標の上又本多川横川あり
揚場川の長海老 牛の河川のかわりてより下よの海老

○品川鱧

品川の鱧は大小ありて又今よの味は濃
大ききもの標し 中小の味は薄し

○池ノ端鱧

池ノ端の鱧は大小ありて又今よの味は濃
大ききもの標し 中小の味は薄し

